

## 第 28 回日本時間生物学会学術大会に参加して

片田 祐真<sup>✉</sup>

名古屋大学 大学院生命農学研究科 動物科学専攻 動物統合生理学研究室

2021 年 11 月 20 日（土）～21 日（日）に沖縄県市町村自治会館で開催された、第 28 回日本時間生物学会学術大会に参加させていただきました。学会参加記の執筆役としてお声がけいただいたので、簡単ではありますが感想を綴らせていただきます。

2020 年に引き続き、2021 年もコロナウイルスの流行と、それによる緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置が断続的に発生している状況下にあります。学会開催前の夏にもデルタ株の流行があり、11 月に控える本会もオンラインのみの開催になってしまうのではないかと不安を感じていました。しかし、私の心配をよそに、コロナウイルスの流行は一旦ピークアウトし、本学会はオンライン・対面のハイブリッド開催という形になりました。このような状況下で対面参加できたことは、非常に幸運なことだったと思います。

本学会のプログラムとしては、様々なテーマに沿った講演が行われるシンポジウムが 1 日目の午前と 2 日目の午前・午後に分けて企画されていたほか、ポスターセッションが 1 日目の午後で開催されました。どちらもコロナウイルス対策のため場所や人数に制限がありましたが、定められた規則のなかで大いに盛り上がることができました。

シンポジウムについては、本学会のテーマであった「南視点の時間生物学」に関連付けた発表が随所に見られたのが、とても印象に残っています。特に、竹村明洋先生の熱帯性魚類の産卵と月光についてのご講演は、その土地での研究を直に聞くことの面白さもさることながら、私自身が月に関連した生物リズムを示すクサブグを対象に研究を行っていることもあり、熱帯性の魚類がどのように月の情報を利用しているのかについて、非常に興味深く拝聴させていただきました。

他の先生方の発表も素晴らしい内容ばかりでした。個人的には、長い時間単位を扱った研究が特に記憶に残っています。一つは、野津了先生のジンベエザメに

ついでの研究で、20 年以上の継続飼育からオスの性成熟や繁殖の季節性を追っており、時間の尺度のあまりの大きさに愕然としました。研究対象を考える時、どうしても人間が生きる時間の尺度に囚われてしまっていますが、その枠から一步飛び出した研究で、関わった方々の地道な努力に感銘を受けました。もう一つは、沼田英治先生のコオロギの生活史の緯度による変異と温暖化についての研究です。半世紀前に行った研究を、半世紀たった今、再度検証することで気候変動の影響や生態の特性を評価されていましたが、巨人の肩の上に立つといった言葉に代表されるような、過去の積み重ねの上に新たな知見を生むことを地で行くような研究だと感じました。私自身も数十年後に誰かの発見の土台になれるような研究をしていきたいと改めて感じた講演でした。

ポスター発表では、自身の研究について様々な人と議論することができ、とても有意義な時間を過ごせました。実は、長引くコロナ禍で多くのイベントがオンライン開催になっていたこともあり、本大会は私にとって初めての対面で参加する学会でした。そんな経緯もあり、発表前は上手くやり遂げることができるか不安だったのですが、蓋を開けてみればとても楽しく議論をすることができました。一方で、これは私の個人的な課題になるのですが、ポスターの議論に参加する際の時間配分が難しく、沢山のポスターを回ることができませんでした。ポスター間のスムーズな移動は今後の課題として、場数を踏んで少しずつ向上させたいと思います。総じて、非常に楽しいポスターセッションとなりました。また、大変光栄なことに、ポスター賞を頂くことが出来ました。ありがとうございました。

このように非常に楽しませていただいた本学会でしたが、この実現は様々な人のご尽力なくして成り立たなかったと思います。まず、対面を含めたハイブリッド開催を進めてくださった大会関係者の皆様、ありがとうございました。コロナウイルスに配慮し、会場

✉ katada.yuma.b5@s.mail.nagoya-u.ac.jp

の人数制限や中継を用いた複数会場での同時進行など、オンラインのみの開催よりもさらに入念な準備が必要であったかと推察いたします。また、本学会では様々な学生さんのお話を聞くことが出来ましたが、学生旅費支援なくして、ここまでの盛況はなかったかと

思います。ご支援いただきまして、ありがとうございました。様々な人のご尽力のおかげで、沖縄での学会を存分に満喫することが出来ました。繰り返しになりますが、関係者の皆様、交流して下さった皆様、本当にありがとうございました。



会場の前の著者